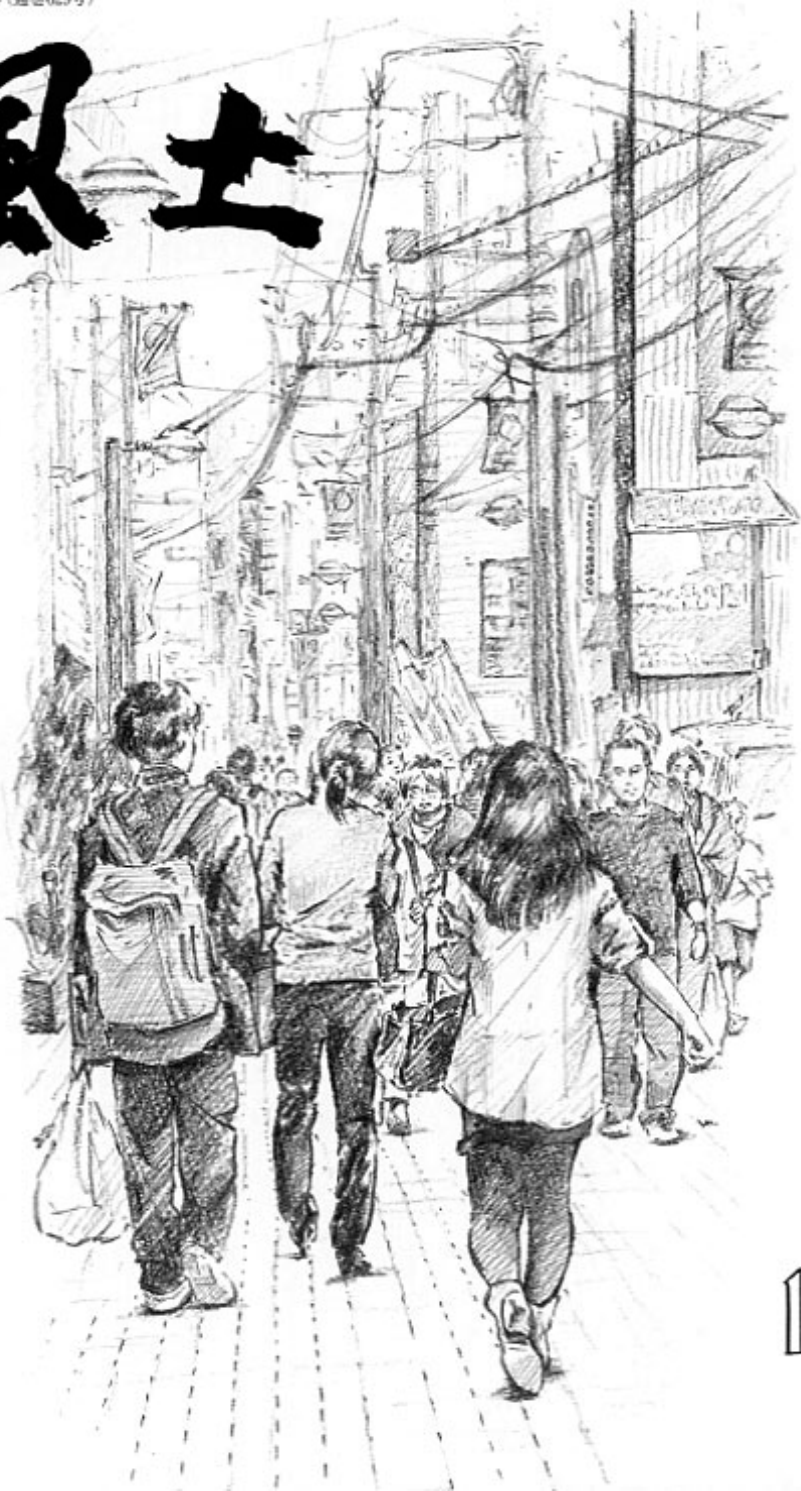


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年12月5日発行(毎月5日1回発行)
第51巻12月号(通巻629号)

風土



12

十月桜
神蔵器

遠き富士近き十月桜咲く

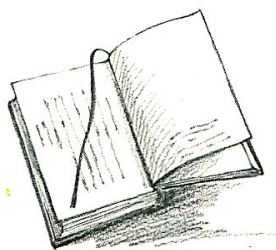
行き行きて芒に消ゆるところまで

青空は藍より出でて秋燕忌

蔓引けばうたのとび出す烏瓜

金槐集ふところにある蔓もどき

噴煙は霧にまぎれずななかまど
温泉たまごコツンと割りぬ霧の中
神代杉千年湖を氷らせず
みづうみに一の鳥居や冬隣
秋は蜷見えぬ道のみ八方に
燕帰る寄木細工の玉手箱
仙石原赤き野焼の火を待てり



竹間集

同人作品



利休下駄

山路 紀子

サボテンやミッキーマウスに耳二つ
色鳥や池田満寿夫の鐘を吊り
今年また子の増えてゐる盆の家
朝露や爪革浅き利休下駄
いくたびも窓にぶつかる秋の蟬
栗剥くやいたづらに歳重ねきて
産土に秋の裸火ともさるる

子規の月

岩木

茂

ひらひらと滝落ちてゐる良夜かな
ゆふぐれのめうがのはなのいとあはれ
ほつこりと溶岩が浮き出る刈田かな
ばつた追ふ眼に青空がいつぱいに
水平線までが牧場秋うらら
はたはたを追ひ太陽に入りゆける
一杯の寝覚めの水や子規の月

蔵さやか

相沢有理子

ひぐらしに琴の音和する佳き日かな
ひとり身の高菜の茶漬け虫しぐれ
九月四日櫛の日父の忌なりけり
蔵さやか墨痕しるき祖母の文
甲冑はいつも定位置そぞろ寒
身に入むや使はぬ葛籠武具その他
城下町対岸ははや紅葉しぬ

秋の蛇

小林 輝子

秋の蛇家を離れてゆきにけり
つまべにを扱みて少女めくことも
亡き人に問ひかけ佇てる花野かな
萩叢の紅ひき起す湖の風
七彩をそろへつつあり座頭えび
北天へ石榴を掲ぐ青邨居
うたかたに触れつ離れつとなめかな

人の秋

小野寺節子

待宵や裏富士雲に隠れゐる
僧の読経聞き分けてゐる萩の風
秋容の裏富士望む父母の墓
伊那谷のいづこにありや秋の声
旅の途次「武田しんげん信玄」拜す人の秋
ながらへて仏に感謝敬老日
点眼のまなうら鳥の渡りゆく

無題

小林清之介

曼珠沙華反りひげ張つて風に立つ
羽根本物の羽根を指す置いて秋黙々の扇風機
野良猫の餌を撒く孫に月が出て
かの犬の手書きの位牌秋香煙
病む秋日こども神輿の声聴くのみ
秋くさめ厨出るとき句の成りて
粉薬に噎せて咳くなり冬隣

醉芙蓉

田村すゝむ

秋暑し音を断ちたる楽器店
百日紅百日燃えて終ひけり
野分来て眼鏡のくもる仏具店
正面に火を噴く山の良夜かな
妻の忌の一つ歳とる醉芙蓉
天高し牧の半ばの塩くれ場
今年又行かず仕舞ひの風の盆

蜻蛉

— 小林 輝子 —

瓢の笛唇にあてれば犬寄り来
くさびらの白盛り上る蝦夷古墳
椋鳥と風入りふくらむいぐねかな
十五里の十里は霧中句会へと
汝のこゑと振り向くに落つ柞の実
多つを亡し二夜の月に雲のなし
白樺に影なき真昼鳥渡る
ひまはりは実に大方の牛舎朽つ
早池峰を降りつつ赤くなる蜻蛉
うたかたを鯉の押しやる桂郎忌

山河集

同人作品



神蔵
器選

蛇笏忌の山に対ひてをりにけり

林 いづみ

新米や白寿に指の届きさう

蓑虫やどこへも行けぬ庭の石
満月や逆さに立てて竹箒

望の夜の電話のベルは一度きり

鶏頭の種採る子規の庭のもの

金木犀籠抜け鳥の群れてをり

蓮の実や欣求浄土の邃し

天野みゆき

詩心の熟れ来たりしや蚯蚓鳴く

白秋や飛簷ひえんの反りに力あり

余生なほ更なる色に秋ざくら

定家葛けふ咲く花と散る花と

水澄みて鯉の背中を鯉すべり

池田 光子

じやんけんのちよきできる子や蕎麦の花

鬼の子の頭出かかる午後三時

蝸や菩提樹影を濃くしたり

布施まさ子

蟋蟀や臨海工業地帯行く

鷺の佇つ向う岸より秋の行く

この下にタイムカプセル木の実落つ

子の走る高さに飛んで赤とんぼ

柿少し色づく下に刃物研ぐ

生田

秋燕に見られつつ畝立て了はる

作

グランドのマーチを遠く大根蒔く

低く来て高く去る鷺真葛原

鶏頭の緋に濃淡のありにけり

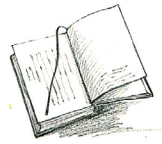
◇特別作品抄◇

伊豆の四季

吉永すみれ

初景色 火の島 一つ海上に
まなかひの富士の霊峰 恵方とす
日の匂ひ 土の匂ひの土筆 摘む
地虫出で思ひのままに 散りゆけり
急流へためらは 落つ藪椿
死は何時も 近くにありて 亀鳴けり
更衣昨日が 遠くなり けり
半島は海より 暮れて 魂迎
天城山口 火切つたるは ぜ紅葉
枯芒どの道 ゆくも 風の中

風土独語／神蔵 器



蛇笏忌の山に對ひてをりにけり

林 いづみ

蛇笏の代表句に

芋の露連山影を正しうす
があることを知らない人はなからう。眼前に広がる里芋畑の大きな葉にかがやく露の玉。遠くには、秋風に澄んで連なる山々の端正な容姿、自註では「南アルプス連峰が、爽涼たる大氣のなかに、きびしく礼容をととのへてゐた」とある。

昭和十一年、前田普羅が山廬を訪れた折、蛇笏に導かれ後山に登った。蛇笏は周囲の山々を指差し情熱をこめて案内していたという。この時の感動がそのまま普羅の「甲斐の山々」の一連の作品となり、俳人として普羅の名を不朽のものとした。ことに「奥白根かの世の雪をかがやかす」は素晴らしい。

さて、掲出句の作者林さんがいま立っているのは後山か、それとも山梨文学館の庭に建つ、蛇笏の生涯ただ一つの句碑「芋の露」の前であろうか。

しかし、私は蛇笏忌に作者が仰ぎ親しく対き合っているのは、現実の山ではなく蛇笏その人、蛇笏山ではないかと思う。たとえ、白根三山の高峰北岳のように厳しく寒気に堪え、誇り高く、やさしく慈愛にあふれる蛇笏山である。いま大きな山の自然の愛

に包まれている幸せに感動している。

白秋や飛簷の反りに力あり

天野みゆき

白秋は季語、秋の異名である。飛簷は一般には聞きなれないが、飛簷垂木の略で、神寺建築で、軒が二軒ふたのきで構成される場合、地垂木の先端に乗る垂木である。

飛簷は勿論屋根を支えるためのものであるが、同時に屋根の美しさ反り加減など演出している。棟梁たちは燕が飛んでいる型とすることで飛簷と呼んだことからこの名がついたという。

平等院や唐招提寺などの屋根の優雅で美しい反りには誰も感嘆し、時を忘れて酔って来たが、飛簷の反りの美観、力強さは見落し勝である。これからは飛簷にこめられた棟梁たちの苦心、心血をそそぐ工夫と業に深く注目して行きたい。

寸莎壁にコスモスの花あかりかな

内藤 静

作者静さんの故郷は千葉県も成田の先の方と聞いている。おそらく、秋の彼岸に先祖の墓参に久しぶりに訪れた田舎の道すげらの所見かと思われる。と、ある一軒の農家に古い寸莎壁の蔵があり、蔵の回りにコスモスがあふれるように咲きほこっていた。

龍太さんは歳時記の中で、コスモスについて「いわば大正から昭和のはじめにかけてのやや古めかしいモダンズムといった感の花である。華麗で繊細、薄情でちよっぴり気の強いところがある

ようだ」と書いている。日本の古くからの建築の土蔵、寸莎壁とは不釣り合いのようで、これほど似合う花はなかつう。和名は「秋桜」であるが、この句については秋桜ではなく、あくまでコスモスでなければならぬ。



風土集



神蔵器選

子規の忌や書架に古りゆく古今集

川崎

内藤 静

おしろいの咲いて隣も同じ姓

丹沢の山並み見ゆる渡り鳥

寸莎壁にコスモスの花あかりかな

悲しきは子規健啖の梨二つ

赤ん坊のてのひらにのる秋の風

福生

雨宮 桂子

かりがねや一遍上人富士仰ぐ

仏龕の如來三尊赤のまま

蛇穴に入る奈良坂の石ぼとけ

ならざかや鷗尾の傾く秋日傘

下り坂又上り坂つくつくし

横浜

安永 圭子

独り居に灯火親しむ幸を得て

掛香や夫の知らざる祈りあり

庭に出で夜長の星を見てゐたり

コスモスや気丈な妻になれぬまま

空仰ぐ石の仏や稲の花

東京

柿沼 盟子

黄のカンナ硝子に映し空き店舗

十六夜の月は生絹の雲まとひ

朝顔のきのふ十三けふ三十

湯島へと抜ける東大桐は実

土塊の素直にほぐれ大根蒔く

津山

生田恵美子

邯鄲や独りの水を飲みに起つ

鶏頭に夜雨の愁ひありにけり

蓮の実の飛んで反り橋音乾く

秋の蚊や我に執念き心なく

古書店の店先にある残暑かな

神奈川

石井 秀一

水の秋石鱈下ろしたてがよき

露草の藍深まれる朝かな

ふるさとは今ゐるところ鳥渡る

秋日濃し花屋は水をよく使ひ